

政治と文学

出席者

祖父江昭二（司会）

伊豆利彦

磯貝英夫

小笠原克

「おい地獄さ行ぐんだで！」

二人は、デッキの手すりに寄りかゝつて、

蝸牛^{かたつむり}が背のびをしたやうに延びて、

海を抱へ込んでゐる函館の街を見てゐた。

—— 漁夫は

指元まで吸ひつくした煙草^{たばこ}を

唾と一緒に捨てた。

巻煙草はおどけたやうに

色々にひつくりかへつて、

高い船腹^{ふなはら}をすれぐに落ちて行つた。

彼は身體一杯酒臭かつた。—— 小林多喜二「蟹工船」一九二九年より



『シンポジウム』日本文学

18

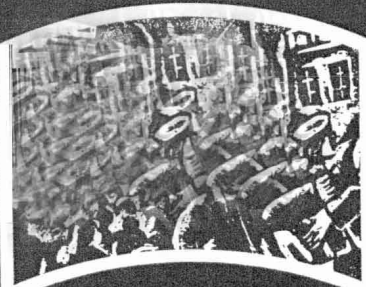
政治と文学

出版者
祖父江昭二
（代表者）

伊豆利彦

磯貝英夫

小笠原克



日本文学

18

出席者略歴

そふえ・しょうじ 一九二七年生まる。東京大学文学部卒業。現在和光大学人文学部教授。主要論文は、『プロレタリア文学』（岩波講座『日本文学史』）、「昭和文学」における『政治と文学』（至文堂『現代文学講座』）など。

いず・としひこ 一九二六年生まる。東京大学文学部卒業。現在横浜市立大学教授。主要著書論文は、『有島武郎』（福村書店）、「日本の文学」（共著・汐文社）、「小林多喜二論ノート1・2」（『日本文学』昭和42・1、昭和43・2）など。

いそがい・ひでお 一九二二年生まる。広島文理科大学文学部卒業。現在広島大学文学部教授。主要著書は、『昭和文学作家研究』（桐原書店）、「日本近代文学史」（右文書院）など。

おがさわら・まさる 一九二一年生まる。北海道大学大学院修士課程。現在藤女子大学教授。主要著書は、『島本健作』（明治書院）、「昭和文学史論」（八木書店）、「『日本』へ架ける橋」（辺境社）、「近代北海道の文学」（日本放送出版協会）など。

司会者の諒解により検印を省略します 514

シンポジウム日本文学 18

政治と文学

昭和51年4月25日 初刷印刷
昭和51年4月30日 初刷発行

司会者 祖父江 昭 二

発行者 鶴岡 隆 巳

発行所 株式会社 學生社

東京都千代田区九段南2-2-4(郵便番号102)
電話 03 (263) 2611 振替・東京1-18870番
編集担当 堀 健二郎

落丁・乱丁本はおとりかえします
Printed in Japan

『シンポジウム』日本文学——政治と文学・目次

はじめに——問題の限定——……………九

第一章 プロレタリア文学

《報告》 伊 豆 利 彦

《報告》の補足説明……………	四
「プロレタリア文学」の登場の必然性……………	九
「宣言一つ」の問題……………	二二
漱石の『明暗』が提起した問題……………	二五
有島の二元的思考……………	二七
「自然」の系譜……………	三二
『坑夫』と『放浪者富蔵』……………	三七
多喜二の屈辱感……………	三八
多喜二の共生感……………	四三
『防雪林』の意味と位置……………	四四
多喜二の直面した課題……………	五一
プロレタリア文学における「自然」……………	五一
『転形期の人々』の可能性……………	五五
プロレタリア文学者の任務とは何か……………	五九
理論・批評と創作……………	六一

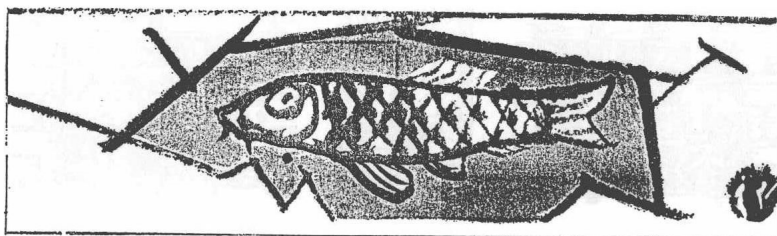


プロレタリア文学と文体の問題	七
徳永直の問題	七

第二章 マルクス主義への対応

《報告》 磯貝英夫

《報告》の補足説明	六
プロレタリア文学と「故郷」	六
横光利一の「唯物論」	六
横光における「自信」の実体	七
横光の「不安」	八
『花園の思想』をめぐって	八
小林秀雄とマルクス主義	九
作家の自己限定の問題——堀辰雄を中心に——	九
井伏鱒二の文学	一三
鱒二・そのユーモア	一四
庶民と知識人の断絶——ことば・文体——	一七
伊藤整——故郷の中の異郷者——	二五
生活の欠落——川端康成——	二九



第三章 転向期における文学

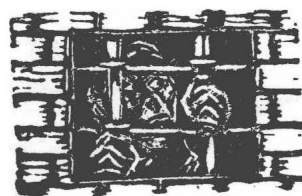
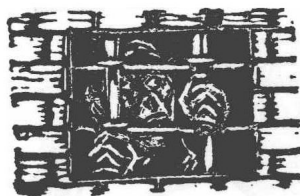
△報告△ 小笠原 克

《報告》の補足説明……………	三三
中野重治の『生活の探求』批判……………	三五
島木健作における「第一義」的なもの……………	四八
中野と島木との対比……………	五三
島木における理念と現実……………	五四
島木論の論点整理……………	五五
吉本隆明の『転向論』と中野の『村の家』——「劣性」なるものの問題性——……………	六三
非転向・党・文学……………	六六
文芸復興——孔だらけの皮膚をさらす——……………	七三

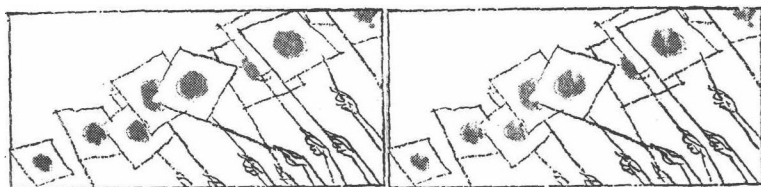
第四章 戦争と文学

△報告△

伊豆利彦
磯貝英夫
小笠原 克



《報告》の補足説明	一六三
火野葦平	一六三
小林秀雄	一六〇
日本浪曼派	二〇〇
『麦と兵隊』と『生きてゐる兵隊』との対比	二〇四
善意と悪を見る眼	二〇九
火野と小林における戦争責任の意識	二一五
小林における「文学」と「現実」——見るということ——	二二六
小林批判の視点——豊かさの問題——	二三三
保田と小林における「古典」の対比	二三六
保田の近代日本批判	二三六
保田の立脚点としての「大和」	二三〇
『村の家』の「命のまたけむ人は」	二三三
保田と「政治的なるもの」	二三四
「政治と文学」という問題——まとめにかえて——	二三七
あとがき	二四二
参考文献	二四七
索引	二五



政治と文学



◀ さあ今度は俺の番だ(百鬼生)

はじめに——問題の限定——

祖父江 初めにこの巻のタイトル、ひいてはテーマについて、司会者として一言申し述べておきたいと思います。この巻は「シンポジウム日本文学」の編別構成でいうと、『大正文学』と『戦後文学』の間にあるわけですから、時期としては戦前の「昭和文学」ということなんです。それが「政治と文学」という、やや異例な題がついていて、それは編集委員の三好行雄さんのご意見らしいんですが、それを一応受けとめてやってみようと、ぼくとしては考えたわけです。ただ受けとめた場合に、明治期にも、あるいは古代にだって「政治と文学」という問題はあったと思うんですが、ここでは言わずもがなのことだけど、昭和の戦前を扱うというふうに限定しておこうということがひとつ。

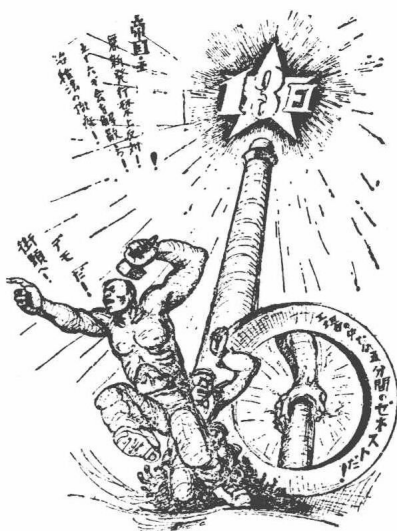
二つ目に、「政治と文学」といっても、わかったようでわからないようなところがある。何が「政治と文学」の問題なのかということがある。しかしここでは、そのことを前もって最初に抽象的に議論し、大まかに定義づけをしてから始めるんじゃないくて、具体的にこれからの討論の中で、「政治と文学」の問題の実態というのは、こういうことなのではなかろうか、ということをやっていきたいと思っています。そのことにかかわって、「政治と文学」というのは、主として敗戦直後の「近代文学」の同人の方々の問題意識なり、そこから出てきた思考のワク組みといったようなものがあると思いますが、そういうものが有効かどうか、というようなことも、このシンポジウムの最後に、「以上の結果あまりいいカテゴリーじゃない」とか、「有効だ」とか、「限度がある」とか、そんなことが出てきたらいいんじゃないかと思うんです。

だから、この巻の編別構成を考えた司会者としては、最初から抽象的に「政治と文学」を論じないが、しかしまた平板に「大正文学」と、「戦後文学」の間の「戦前の昭和文学」というふうにおさえないで、やはり「戦前の昭和文学」を「政治と文学」という問題的な文学現象に力点をおいて考えてみようというので、そのタイトルを承認し、このような編別構成をしたわけです。そのことを最初に申し上げておいた上で、第一章から始めたいと思います。

* 補注について 補注は、各発言者の手による。その他に、編集部責任においてつけたものは、(編)と表記した。

* * 図版について

近代文学館・角川書店のお世話になった。御礼申上る。



▲ 帝國主義×××(目黒生)

第一章 プロレタリア文学

(a) プロレタリア文学の課題

近代文学は新しい生き方を求める人間的自覚に支えられて成立発展した。それは社会的・政治的関心を含む全人間的関心の所産である。したがって、社会矛盾が激化した変革の時代には、文学者は先頭にたつて戦った。文学と政治とは異質であり、鋭い矛盾を内包するが、文学の精神と、革命の精神とは重なりあうものがある。

〔大正中期から昭和初頭にかけて、資本主義の矛盾が激化し、日本社会は土台からゆり動かされた。既成の価値観は崩壊し、文学芸術も根本的変革を迫られた。その根底には労働者階級の成長発展がある。新しく登場した労働者出身の作家達は、労働者をたんに悲惨な同情すべきものとして描くのではなく、労働者の社会に対する反抗と憎悪、強い自己主張を表現した。〕

初期プロレタリア文学を成立させたのは、自分も人間だという

報告 伊豆利彦

労働者の人間的自覚であるが、疎外された階級であるプロレタリアの人間的自覚は階級的自覚であり、観念的なヒューマニズムを否定するものであった。プロレタリア文学は人間の自然と本能の肯定から出発するが、その自己主張は社会に対する闘争と不可分である。それは自然主義文学を母胎としながら、その克服を課題とした。プロレタリアにとっては、自然も美も階級的なものであり、新しい芸術の創造が目ざされなければならなかった。

〔葉山嘉樹の『海に生くる人々』(大正二五)は労働運動の上昇と昂揚の時代を代表する画期的な作品である。初期プロレタリア文学は、労働者の現実の闘争に支えられていなかったために、社会に対する抗議、憎悪と反逆の感情の表現にとどまり、孤独と悲哀の感情が漂っていたが、葉山は、労働者の昂揚する戦いを描いた。労働者の眼で自然と社会をとらえ、労働者を人間として、肉体と感情、その内的衝動の深みから描き出し、新しい文体を創造した。〕

第一次大戦後の社会矛盾の激化は、ロシア革命の衝撃と相まって、大正のヒューマニズムの崩壊を招き、知識人は自我の分裂と解体に直面した。有島と芥川の子殺はこの時代の知識人の苦悩の深さを示し、新感覚派の試みも、知識人の危機の自覚の所産である。マルクス主義が一世を風靡したのは時代の必然であった。プロレタリア文学もマルクス主義青年知識人の大量参加によって新しい転機を迎え、革命を志向する組織的な運動として展開されることになった。そこに目的意識が強調され、実作に対して理論が先行するという問題が発生した。

(b) 小林多喜二

〔多喜二はプロレタリア文学運動の象徴として、讃美もされ、非難もされている。しかしひたすら運動論的に、政治的に論ずるのでなく、この激動の時代を生きたひとりの青年知識人として、その文学的生涯を通して究明し、どんな新しい文学世界を切り開いたかを明かにする必要がある。プロレタリア文学運動を多喜二の外部の問題としてでなく、多喜二自身の内部の問題として考え、政治と文学の問題についていえば、政治を文学内部の問題として考える視角が必要である。『党生活者』（昭和八）『転形期の人々』（昭和六七）など、死の直前の諸作品において、多喜二は、自身自身の生いたちを想像し、父や母の生涯を現在の戦いと結びつけ

て描いている。多喜二の文学は、その生いたちに根ざし、貧農の子としての自覚に貫かれている。マルクス主義とプロレタリア文学の理論は、多喜二の現実を見る眼を拡大し、その文学世界を拡大したが、多喜二を前進させたものは現実そのものであって、『雪の夜』（昭和二執筆）から『一九二八年三月十五日』（昭和三）『東俣知安行』（昭和五）を経て『党生活者』にいたる道は、決して観念的飛躍によって、いっきよに実現されたものではなかった。

多喜二は社会の暗黒と同時に自己内部の暗黒——本能的欲望やエゴイズムを直視し、人間をその内的衝動の深みから描き出そうとした。しかし人間が人間として生きようとすれば、苛酷な天皇制国家権力との戦いを回避することはできない。多喜二はその文学的生涯を日本の革命運動と結びつけた。

『人を殺す犬』（大正一五）『防雪林』（昭和三執筆）から『蟹工船』（昭和四）『不在地主』（昭和四）を経て『転形期の人々』にいたる展開は、日本資本主義の土台である、もともと野蠻で原始的な、前近代的な搾取と労働者虐使の事実を直視する所から出発して、革命運動の発展を大きな広がりとして立体性をもって描き出すに至る道程であった。

〔日本の革命運動は未熟で幼稚であった。大衆から孤立して、敗北を必至とする戦いを戦った。多喜二はその矛盾も弱点も一身にひきうけて戦い、そうすることで新しい文学世界を切り開いた。

苛酷な現実とは小市民的な「人間的」という観念を容赦なくうちこわした。『多喜二』はこの非人間的な暗黒の現実にのみ、人間を前に突き出す革命のエネルギーの源泉を見た。多喜二の思想と文学は、「人間的」という小市民的な観念をうちくくすることによってのみ、その発展の道をきりひらいた。「人間的」という観念によりかかって、多喜二の文学を否定することはできない。」

(c) 徳永直

直もまた貧農の子である。幼年時代からきびしい労働と差別の中で成長し、小学校中退でさまざまな労働に従事しながら、階級意識に目覚めていった。その点、小市民的生活の矛盾に悩み、自己否定の形で革命運動に参加した多喜二と対照的である。直は労働者の生活をたんに悲惨で暗黒なものとしてのみ描かず、労働を中心として展開する多様で豊富な人間的な生活として描いた。

組合活動の中で、組合機関誌に発表した『馬』（大正二四）その他は、労働者に共通する、労働そのものの中で成長した幼年時代の記憶を掘り起こし、そこに労働者としての自覚の根源を探ろうとするためのものであった。

「作者自身の体験にもとづく『太陽のない街』（昭和四）は、資

本が政治と結びつき、労働者の生活を破壊して進む姿を描き、労働者の激しい闘争と敗北を立体的に描き出し、当時の運動が直面する問題を鮮かに照らし出した。とくに続篇『失業都市東京』（昭和五）は、悲惨な敗北の傷痕をえぐり出している点が注目される。」

経済界の不況、恐慌、そして大資本の連合、技術革新、産業合理化が、労働者の生活を、中小資本を破壊して進行する。しかしどんな時にも労働者は喰わなければならず、働かなければならぬ。この労働者の矛盾を直は直視し、喰うために自ら首をしめるようなことをする労働者、封建的な義理人情に縛られている古い意識の労働者、当時の運動がふりすててかえりみなかった遅れた大衆の現実をも、直は深い愛情をもって描いている。

多喜二はひたすら、あらゆる矛盾をふりきって、前進する戦いを描いたのに対して、直はひたすら労働者の生活に眼を向け、労働者内部の矛盾のみならず、前衛内部の生活と意識の矛盾にも眼を注がずにはいらなかった。そこにおくれた大衆を切り捨て、生活を無視して直進する観念的な指導に対する批判が生まれた。直の提起した問題は、新しい角度から検討されるべきであらう。

《報告》の補足説明

伊豆 第一に(a)のところでは取り上げたのは、プロレタリア文学の問題を、日本の近代文学史全体の中で位置づける必要があるのではないかとことです。近代文学一般を考える場合には、何か「政治と文学」などというところを取りはずして別ワクで考える傾向が多いんだけれども、そうではなくて、近代文学そのものが成り立っていくときに、「政治と文学」というような問題は、出発点から問題にならざるを得なかったと思う。それはなぜかということがひとつありますね。それがとくに、大正の中期から昭和初頭にかけて決定的に重大な問題になる。だからそのプロレタリア文学を考えるためには、近代文学全体の動向というものを、一応大きく考えてみる必要があるんじゃないか。それまでのヒューマニズムというものが崩壊していく。それは、「白樺」派にいちばんはつきりあらわれてくるわけだけれど、自己^{ポエム}宇宙^{ユニバース}みたいな、そういう等式が成り立たない。異質の存在であるところのプロレタリアートが登場してくることによって、それが大きくゆるがされていく。それが漱石の『明暗』（大正五）などに、すでに小林というふうなものを通して描かれている。つまり主人公の津田とかお延とかの小市民的意識というものが、小林というもう一つの光で照らし出されることで、次第に不安に陥っていく。そういう問題がすでに大正の初めから出ている。夏目漱石でいえば、ハートとヘッドの分裂というふうな形でその問題が、『彼岸過迄』（明治四五）などにも出ているわけです。夏目漱石の場合には、『坑夫』（明治四二）のような作品がすでにあるわけで、そういう暗い部分というのは、自分の心理的な暗さというものと、社会的な位置というふうなものがからまって出てきていると思うんですけれども。そういう問題が次第に深刻になってきます。

* 『明暗』における小林について

『明暗』の主人公津田は比較的恵まれた位置にいて、小市民的幸福を享受しているが、たえず焦燥にかられ、生活の虚偽性と空洞化を深める。これに対して津田の友人小林は、当時の社会からはみ出した貧しい知識人で、職を求めて朝鮮に流れて行く。漱石はこの小林の言動を通して、失うべきものをもたぬ者の立場から、小市民的生活の虚偽性と空洞化を鋭く批判している。